

「お寺の可能性を引き出そう！—社会におけるお寺の役割を考える—」
西本願寺にて真宗が抱える課題とこれからについて学びました

「社会共生実習」とは、龍谷大学社会学部の
全3学科が共同運営する地域連携型の実習です。



龍谷大学 社会共生実習ニュースレター

Infinity Vol.22

～大学と地域の協働力は無限大∞～

2026.05.29 発行

発行元
龍谷大学 社会学部
社会共生実習サポートデスク

〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67
龍谷大学社会学部階教務課
社会共生実習サポートデスク
TEL:075-645-2304
FAX:075-585-6377
E-mail:co-ex@ad.ryukoku.ac.jp

2026年度の活動がスタートしました！

お寺の可能性を引き出そう！
—社会におけるお寺の役割を考える—

担当教員:猪瀬 優理 教授

いまお寺では、これまでお寺と直接のご縁がなかった人も参画して、地域の居場所やつながりをつくる活動が行われています。本プロジェクトでは、そうしたお寺の社会活動に参加しながら、地域におけるお寺の役割と可能性を考えます。

4/18(土)には、波佐谷真悟さん(浄土真宗本願寺派 教化部 部長)に、現代社会において浄土真宗本願寺派の置かれている状況、および、さまざまな世代の人びとや地域住民とのつながりづくりに関する取り組みを中心に、「ご縁づくり」に対する本願寺派の考え方や教化部の具体的な取り組みについてご講演いただきました。

ご講演では、宗教法人の事業や日本の宗教事情にはじまり、寺院・仏教・僧侶に求められていることや真宗の泣き所などもお話しくださいました。

また、真宗の脅威となるもの、機会(チャンス)となるものの両方に生成AIの登場・普及を挙げておられました。インターネットの普及も変化をもたらしています。例えば、西本願寺で開催されるひとつの行事の参加者がコロナ禍以前は満員だったのに対して、現在はライブ配信するようになったこともあり、ライブ配信では700~800人の視聴数がある一方で実際に来越してくださる方がずいぶん減ってしまったというお話をされていました。

そのほか、近年は「墓じまい」の相談が非常に多いことや、近年では家の宗教を継承する習慣が薄れつつあり、これからは寺院も僧侶も選ばれる時代であると危機感を持っておられました。これには数値的な裏付けもあり、真宗のみ教えを伝えるべきお寺が年に20ヶ寺も維持できずに閉じられる状況が大変憂いているとお話しされていました。



波佐谷真悟さん



畑中阿難さん

講演後は、畑中阿難さん(浄土真宗本願寺派 教化部 事務職員)に、国宝の阿弥陀堂(あみだどう)と御影堂(ごえいどう)をご案内いただきました。

阿弥陀堂の廊下では、長年にわたってできた亀裂や穴を修復する際に大工さんの遊び心で鷹やひょうたん、魚などといった可愛い埋木が施されていることを教えていただいたり、御影堂の前では大きな雨水受けを支える天邪鬼(あまのじゃく)がおり、皆さんも素直じゃないとこの天邪鬼のような目に遭うかもしれないから気を付けてと洒落を挟んでくださったりと、一目では見落としてしまいそうな面白いポイントをたくさん教えていただきながら拝観することが出来、楽しくも貴重なひと時を過ごさせていただきました。

本プロジェクトでは、いくつかの寺院を訪問させていただいたのち、受講生たち自身が地域におけるお寺の役割と可能性を探り、課題解決に向けてさまざまなアプローチをおこないます。今年度の受講生たちがどのようなアプローチを見出すのか楽しみにしたいと思います。



魚やひょうたんの埋め木



雨水受けの重さに耐える天邪鬼

担当教員: 脇田 健一 教授

本プロジェクトでは、滋賀県大津市の中心市街地(中央学区を中心としたエリア)の関係者の皆さんとのコラボを通じて、まちづくりの活動を実地に学びます。地域の課題を関係者の皆さんとともに学生自身が見つけ出し、その課題解決に向けて活動します。

昨年度、本プロジェクトの受講生は、実習先である滋賀県大津市中心市街地で「商店街を訪れる親子連れが少ない」、「大きなイベントの時は人が集まるが、日常的なにぎわいを維持するのが難しい」といった課題があることを知り、継続的に実施できる親子の居場所づくりを目標に活動してきました。その結果、地域の方のご協力を得て、ナカマチ商店街のレンタルスペース「ナカマチスタジオ」を会場に、絵本を自由に手に取って読める温かな空間「ナカマチのひみつきち」を提供することができました。

この企画を引っ張ってくれていた元・受講生の松尾成美さん（現代福祉学科3年生）は今年度、授業としてではなく自主的に地域に入り込んで活動を継続してくれています。

同企画が4/25（土）にも開催され、今年度の受講生も地域現場を学ぶために会場へ訪れました。

この日も朝から盛況で、たくさんの親子が訪れて思い思いの本をとり、ゆっくりとした時間を楽しんでくださっていました。

今年度の受講生の中には、短期大学部から社会学部に編入した学生も数名おり、そのうちの大中原ゆらさん（現代福祉学科3年生）は、「短大のときに行った保育園の実習ではたくさんの子どもたちの対応をしましたが、このイベントでは1～2人の子どもたちとの時間を大事にできるので、また違った楽しさがあり、とても楽しく取り組みました。」と話してくれました。



短期大学部こども教育学科からの編入生はいずれも保育士資格と幼稚園教諭二種免許状を取得しており大変頼もしいメンバーですので、本プロジェクトのこれからの活動がとても楽しみです。

本企画は次回を **6/27(土)10:00~14:00** に予定しています。
お近くにお住まいの方、この活動に興味のある方はぜひ足を伸ばしていただけますと幸いです。



ナカマチのひみつきち Instagram ▶

農福連携で地域をつなぐー

「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」

担当教員: 坂本 清彦 准教授

本プロジェクトでは、実習先である滋賀県栗東市のNPO法人「縁活」で、障がい者が農業に携わる農福連携事業に関わることで、多様な人々が地域社会とつながり、いきいきと暮らせる共生社会の実現に向けた課題発見、解決のための企画・実践をめざします。

4/17（金）には、「縁活」が運営する農福連携事業“おもや”の農園でトマトの誘引作業をお手伝いしました。



受講生の中原一茶さん（現代福祉学科）は、初めての作業に戸惑いつつも、“おもや”のスタッフや利用者の方に丁寧に教えていただきながら作業に励みました。

中原さんは、「作業を通して、トマトの育て方についてよく知ることが出来て面白かったです。こうやって、私たちの身近にある食べ物はずごく丁寧に作られているのだなと、ありがたく感じました。」と話してくれました。

また、“おもや”では、農園で採れた野菜を提供するオモヤキッチンというレストランを展開されています。

5/15（金）には、オモヤキッチンで販売するスナップエンドウなどの出荷作業をお手伝いしました。作業の主な内容は、形の良いもの、悪いものの選別、袋詰めするための計量です。形の良いA品は袋詰めされてオモヤキッチンの店頭に並び、

色が薄かったり小さいものはB品として加工品になったり、“おもや”で飼っておられるヤギの餌になったりするそうです。

中原さんは、日ごろは農作業も障がい者の方とも接点がないということですが、農作業は楽しく、“おもや”の皆さんの明るく和やかな雰囲気がとても居心地が良いとお話ししてくれました。

また、一緒に作業させていただいていた利用者の方は、もともと居た事業所の紹介で、選択肢3つの中からこちらを選んだそうで、“おもや”での作業は農作業でも出荷作業でもオモヤキッチンのホールスタッフでも、どの仕事も好きで自分に合っていて、もう5年ほど居ますと話してくれました。そのことから、利用者の方々にも居心地がいい場所なのだということを感じることが出来ました。



Webサイト・SNSでは最新の情報を随時更新中♪ぜひご覧ください！



社会共生実習 Webサイト



社会共生実習 X



社会共生実習 Instagram



社会共生実習 Facebook